元非行少年が自らの回復のストーリーを語る意義と効果

○　日本福祉大学　社会福祉学部　　湯原悦子（００３７４５）

キーワード：非行少年、非行からの離脱、社会的包摂

１．研究目的

2016 年 12 月に「再犯の防止等の推進に関する法律」が施行され、犯罪や非行からの離脱や、犯罪や非行をした者の立ち直り支援は重要な政策的課題となっている。犯罪や非行からの離脱に関し、注目すべき研究としては 2001 年、イギリスの研究者が犯罪を続けている者と犯罪をやめている者を対象とし、犯罪からの離脱とは何かを探求したリヴァプール離脱研究が挙げられる。この研究では、対象者の語りが詳細に分析され、犯罪離脱者は過去を変えることはできないと自覚しつつも、自分こそが自分の運命をコントロールしているという強い感覚を持っていることが明らかにされた。そして、犯罪からの離脱の過程においては慣習的な他者から改善と更生への努力を承認される『回復の儀式』が重要であると指摘されている。一方で、『回復の儀式』に立ち会った他者は犯罪や非行をした者の語りをどのように受け止めたのだろうか。何か学びを得たり、認識の変化を自覚したりすることはあったのだろうか。

本研究では、日本において、過去に非行を行った少年が自らの回復のストーリーを他者と分かち合った場面に焦点を当て、聞き手である他者が少年の話をどう受け止め、どのような認識の変化を自覚したのかについて明らかにすることを目的とする。

２．研究の視点および方法

日本において『回復の儀式』は制度化されていないが、民間レベルでは、たとえば再非行防止をミッションに掲げる NPO 法人Ａが一般市民向けに勉強会を開催し、過去に非行を行った少年が、過去から非行から離脱した現在に至るまでのプロセスを語り、参加者と分かち合う機会を設けている。本研究においては、この NPO 法人Ａの協力を得て 20 名の少年の語りと参加者アンケートの回答を調査データとした。

分析にあたっては、SPSS Text Analytics for Surveys 4.0.1 を用いてテキストマイニングを行い、カテゴリの抽出を行った。その後、抽出されたカテゴリの有無を０、１値に変換し、非行経験者、非行少年の家族、支援者（矯正関係者）、（それ以外の）一般の人々という区分を設け、違いが生じるかどうかを確認するコレスポンデンス分析を試みた。

３．倫理的配慮

日本福祉大学研究倫理ガイドラインに沿って研究を行った。調査データはすでに NPO 法人Ａが出版した報告冊子に記載されているものを用いており、分析と結果の公表にあたっては、NPO 法人Ａの理事長から文書で承諾をいただいている。

４．研究結果

元非行少年らの話は他の人々にどのように受け止められたのか

参加者アンケートの「少年の話」への感想（自由記述）を分析した結果、20個のカテゴリが抽出された。「少年の心情」を知った、「本音を聞けた」との思い、「人は変わる」「（更生にあたって）重要で必要なこと」への気付き、「人を信頼する」ことの重要性、「少年の力や強さ」「成長」の発見、少年が「素直」であることへの驚き、非行という行為が少年にとってどのような意味があったのかを問う「経験の意味」、少年の親や家族に思いを馳せる「親や家族」、話し手の少年の〝今〟を承認する「すごい/すばらしい」「感動した」「頼もしく思う」などの気持ち、少年を取り巻く「支えてくれる人の存在」「大切な人の存在」への注目、「非行行為」「更生のきっかけ」への注目、少年が果たすべき「責任」、そして「今後への期待」、少年の今後の「目標」への関心などであった。

全体的に多かった内容は、順に「本音を聞けた」との思い、「少年の力や強さ」の発見、「少年の心情」を知った、であった。

聞く者の立場により、少年の話の受け取り方に違いがみられるのか

非行経験者で最も多かったのは「本音を聞けた」、次が「少年の力や強さ」であった。少年の家族では「本音を聞けた」で、支援者では「少年の心情」「少年の力や強さ」であった。支援者は他の区分と比べ、「人を信頼すること」「親や家族」への言及が多かった。一般の人々では、「少年の力や強さ」「本音を聞けた」「人を信頼すること」が多く、他の区分と比べ（少年が）「素直」であることの驚きや、少年の語りに「感動した」との感想が多かった。

５．考察

日本では非行少年の心情や本音が語られる場はほとんどなく、彼らの回復の度合いを一般市民が承認する制度も設けられていない。本研究により、非行少年が自らの回復について語る場を設けることは、少年の非行からの離脱のみならず、社会的排除を防ぐ点からも効果的であることが示唆された。「少年の話」の聞き手は少年の〝今〟を承認するとともに、少年自身が持つ力や強さを見出し、尊重する気持ちを示している。この気付きは少年の存在を認め、少年を社会に包摂する動きにつながっていくことが期待される。ただし、このような変化を生じさせるためには、聞き手が少年の話に耳を傾け、少年の立場に立って話を理解しようと努めることが不可欠である。非行少年が自らの回復について語る場を設ける今後は語りの場をより効果的なものとしていくために、少年が語るタイミングの見極め方や、少年の話を聞く際のルール等について検討を行っていくことが求められる。

謝辞　本研究はJSPS科研費18K02174の助成を受けて行ったものである。

引用文献　Shadd Maruna(2001) Making Good: How Ex-Convicts Reform and Rebuild Their Lives.,American Psychological Association.（＝津富宏／河野荘子監訳『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」元犯罪者のナラティブから学ぶ』明石書店）